

ロックの生涯と思想形成

井 上 和 幸

1.

ロックは認識論の始祖であり、イギリス経験論の大成者である。彼はスコラ哲学の空虚な論争に反対して、市民社会に生きる市民的人間の悟性能力の自己吟味、すなわち、われわれの認識の起源、確実性および範囲を研究する認識批判が一切の形而上学的研究に先行すべきことを説いたからである。¹⁾

彼の主著である「人間悟性論」によると、デカルトやケンブリッジ・プラトン主義者たちに見られるよう生得観念の説を否定して、あらゆる観念が経験 (experience) に由来し、このような観念に基づく認識もまた、経験に依存するという点から論をおこしている。彼に従えば『人間の精神 (mind) は白紙の如きものであって、一切の観念 (idea) は経験すなわち知覚に源をもつものである。』ということである。²⁾

ロックは一般においては、啓蒙思想の代表者として取り上げられているが、その理由はおそらく、彼の思想が以後フランスに渡り、ボルテール、ルソーによってフランス革命がなされ、ドイツにおいては、ゲーテ、シラー、カント等人文主義者に影響を与え、近代を開く端緒をなしたからであろう。

このことは、ロック自身がちょうど、中世の封建制度がルネッサンスや宗教改革によって崩壊の過程にあり、新しい商業資本家に代表される市民階級が台頭し始めた17世紀に生まれ、新しいものと古いものとが混合しながらも

注1) J. Locke: An Essay Concerning Human Understanding (Every man's Library) p. 5

2) *Ibid*, p. 77

次第に分離しつつあった時代の流れの中で青年期をおくり、政治的にも社会的にも宗教的にも激しい論争と運動の展開されていた17世紀の中期にこれらの諸々の問題と取り組み、絶えず近代人としての生き方と方向を見極めて行動してきた結果からも推論することができる。

17世紀は、イギリス歴史の上で最も波乱に富んだ劇的な時代であり、当時の啓蒙思想は、理性と自然の観念に照らして権威と伝統を厳しく批判し、既成宗教に不信を表明し、科学的知識の普及によって現世的幸福の達成を図ろうとするものであり、人間固有の知性の光を高らかに掲げ、無知の迷信の闇を駆逐するための「力」への「知」の絶えざる転化を通して、外的小および内的自然に対する支配を拡大してゆき、文字どおり明るい社会を造り上げてゆこうとする能動的な人間観、世界観であり、前代の世界観と全面的な対決をなすものであった。

ロックは、この啓蒙時代の先駆者であり、啓蒙思想の指導者であった。哲学ではイギリス経験論の礎石を築き、政治社会では、名誉革命を成功させ、立憲君主制を頂点とする近代市民社会の理論を打ち出し、経済では、アダム・スミス (Adam Smith. 1723-1790) が現れるまでは貿易差額論を唱え、正統派重商主義者として君臨し、イングランド銀行設立にも寄与している。

宗教面では、キリスト教の合理を企て理神論の開拓者、促進者として、また寛容の闘士として名を成し、出版の自由、文化の擁護者として業績を残している。

これらのロックの思想の源流を辿ってみると、啓蒙主義そのものが、人間における自然的なるものに関する理論、つまり広義の「人間論」(人間における自然的規定制)が、他のすべての理論に対して原理論の位置を占めていたのであった。

ロックは激しく揺れる時代の中で『人間とはいったい何なのか？何をなし、何を考えなければならないのか』を、自分自身の問いとして投げかけ、人間の生きる姿を、その観察において捉え、あるがままに経験を記述し、その中を貫通する法則を見だし、人間研究、人間学に着手したのであった。

1993年12月 井上和幸：ロックの生涯と思想形成

この方法をデカルト (Rene Descartes. 1596–1650) とベーコン (Francis Bacon. 1561–1620) より学び、彼の代表的書物である「人間悟性論」(An Essay concerning Human Understanding) を作成している。

近世人が中世の桎梏から脱して自主自立の人間らしい人間になるには、なによりもまず個人として個体としての人間であることが最初に大切な順序だったのである。

そして、外側の制度や組織を在来の人間束縛から解放し、人間の自主と自立を尊重する制度および組織に改め、一人一人の人間が自分自身の内部で彼を拘束していた権威から解放して、自ら考え行う態度を身につけることが必要であった。

近代人の誕生には、どうしても個人の確立が歴史の過程において踏まねばならぬ第一段階であったのだ。

「人間悟性論」は、ロックの書物の中で厳密な意味における本源的な部分であり「寛容論」(Epistla de Tolerantia ad Clarissimum Virum. 1689)等の宗教理論、「政治論」(Two Treatises of Government. 1690)「教育論」(Some Thoughts Concerning Education. 1693)「利子論」(Some consideration of the Consequences of the Lowering of Interest and the Raising of the Value of Money. 1691)³⁾、その他未発表の論文等すべてこれらは、何等かの形において「人間悟性論」からの派生的部分であり、それと密接な関連を保って述べられているのであり、すべてが前記した人間研究の現象面に於て効果を発揮し、近代市民社会の個人を形成してゆく要素となっているのである。⁴⁾

3) Locke: by John Dunn (Oxford University Press. 1984)

「ジョン・ロック」ジョン・ダン著 加藤 節訳 (岩波書店) p. xxiii

4) 拙著 * 旧姓 (小柳和幸) 九州女子大紀要第五巻第一号, 1969, p. 78

2.

ロックは、1632年8月29日にイングランドの西南部サマセット州 (Somerset) のリントン村 (Wrington) に生まれた。

当時のイギリスは、まだウェイルズを含めたイングランドだけで、アイルランドは植民地であり、スコットランドは独立王国だった。⁵⁾

ロックの家は、祖父のニコラス (Nicolas Locke. 1574-1648) の代までは、当時のイギリス社会を前進させた中心勢力の一つであった中流商人階層 (毛織物商人) であり、祖父の代にサマセット州に土地を買って地主となり、同時に毛織物の問屋を営んだらしい。

しかし、彼の父、同名のジョン (John Locke. 1606-1661) は家業を継がず、法律の勉強に励み、若くして地方弁護士の地位を築き、サマセット地区の治安判事書記官をしており、経済的にはあまり豊かではなかった。だが、母の生家は製革業者で、裕福な家であった。

ロックの父は、その職務と信仰にうってつけの謹厳実直な人であったらしく、また母も敬虔なピューリタンで、愛情深い人であったらしい。⁶⁾

家庭は長老派の清教徒の家であり、母の生家もそうで、親戚知人は大抵同じ派の信仰をもった人であり、幼いロックは早くから宗教的情操と道徳的感情を培い、自立と自由愛好の精神を吸収していったのである。

ロックが生まれた当時は、チャールズ一世が支配しており、専制的な政治が行われていた。世界史等で有名な「権利の請願」が議会から国王チャールズ1世へ提出されたのは1628年のことで、ロックが生まれる4年前の出来事である。その後、議会は解散されたまま10年以上も開会されず、国王の独裁政治が続いたのである。

1642年夏、ちょうどロックが10歳のとき、このチャールズ1世の悪政に耐

5) 大槻春彦「ロック」(牧書店) p. 20

6) 同上 p. 21

えかねて内乱が起こった。いわゆる市民戦争（The Civil War）と呼ばれるものである。

このとき、ロックの父も議会軍の騎兵大尉として従軍し宗教的・政治的信念に燃えて戦っている。しかしながら王党軍の反撃を受け、家や土地などの実質的損害を受け、また、精神的にも時代の荒波の激しさを知らされたのである。

ロックの父が仕えた治安判事ポファム（Alexander Popham）は、長期議会の議員であった。内乱のときはブリストル市を守る議会軍の1隊の隊長となり、ロックの父はその部下の将校となったのであった。ポファムの隊は国王軍の追撃を受けて、隣の州のウィルトシャーで潰滅した。以後、ロックの父もポファムも戦列に加わることはなかった。ポファムは議員としてサマセット州を代表し、ロックの父は地方役人として生きた。⁷⁾

1664年、ロックは、14歳にして初めて学校へ入学が許された。内乱下の物騒な世相が入学を遅くさせたのであろうが、内乱時の彼の父の上司ポファム大佐の推薦によるものであった。⁸⁾ 議会軍が国王軍に勝ち、主なる教育機関が議会の支配下に入るようになったとき、議員のポファムは、旧部下の息子をウェストミンスター・スクールへ推薦入学させたのであった。

ロックは、1647年の秋より、この清教徒派の学校へ通学することになり、ここで厳格な教育を受けることになった。年齢はすでに15歳になっていた。

伝統的な古典主義に基づく教科編成がなされ、ギリシャ語、ラテン語の訳読、暗誦、作文、文法が主で、上級になるとヘブライ語、アラビア語も課せられる形式主義の教育であったので、暗誦や鞭による訓練に反感を抱いていたようである。⁹⁾

この学校の教育への批判が、後の「教育論」の主題となったことも推測される。

7) 野田又夫「ロック」(講談社) pp. 6-7

8) M. Cranston: Locke (Longmans, Green & Co 1961) p. 9

9) 押村 襄「教育に関する考察」(玉川大学出版) p. 363

しかし、一面に於ては、年少者の教育のためにしつけを厳しく行っている点で成果を認めている。

学校生活は、1週間のうち、月曜から木曜までの4日間は、5時に起床。早朝の祈りを済ませると、6時から8時まで2時間はラテン語やギリシャ語の文章の英訳と解釈を学び、やっと朝食。9時から11時まででは逆に英文をラテン文、ギリシャ文に訳したり、散文や韻文を作ったりするのである。

昼食後、13時から15時までは午前中と同様の古典語の学習で、15時から16時まででは自由時間で、やっと自由に遊びごとができた。

金曜日は自修日で、土曜日は全学年の生徒が一緒になって古典語による演説や討論を開催、古典語修得の成果が試された。

ロックは前記したように学校の教育方法には不満をもっていたが、よく勉強もし、成績も優秀で、1650年18歳のとき、選抜試験に合格して「国王奨学生」に選ばれている。

1649年1月30日チャールズ1世が、学校のすぐ近くのホワイトホール宮殿広場(Whitehall Palace Yard)で処刑されたとき、ロックは眼前にみることはできなかったが、戦争の悲劇と政治的狂熱の行き過ぎに当惑して、深く心を動かされ、寛容の必要を体験したのであった。

寛容の必要を彼に教えたのは、校長のリチャード・バズビ(Richard Busby)で、王党派にもかかわらず議会から校長の席に留まることを許された彼は、処刑されたチャールズ1世のために全校生徒を集めて公然とお祈りを行ったとされている。

非寛容と狂信を戒めるゆるやかな心の持ちかたをロックに教えたのである。¹⁰⁾

3.

1652年、20歳のロックはウエストミンスター・スクールを卒業してオック

10) 大槻春彦「ロック」(牧書店) p. 24

スフォード大学 (Oxford univ.) のクライスト・チャーチ (Christ Church) に入学した。由緒ある学寮の給費学生に選ばれたからである。

オックスフォードは内乱当時は王党軍の牙城で、クライスト・チャーチは1642年から46年春まではチャールズ1世の本営であったが、清教徒革命後は運営も清教徒主義に改革され、特にクロムウェル (Oliver Cromwell. 1599-1658) の熱心な追隨者であった神学者ジョン・オウエン (John Owen) によってなされていた。オウエンは、1649年1月31日 国王処刑の翌日、議会で宗教に関する寛容を説教した人である。

「迫害を受けている側から寛容を要求することは、既に度々行われているが、迫害を受けておらず、むしろ迫害を加える側にいる者が寛容を唱えることは希である。わたくしはそれをしているのだ。」と言ったそうである。¹¹⁾

かれは独立派に属していたが、自らの属する教派以外の教派や教会の人々に対して寛容であって、オックスフォードで国教派の信仰をもつ人々が私宅でミサを行うことも黙認した。

学校の内は内乱以前よりも、しっかりと整えられていた。けれども、学科の内容は中世風の厳しい古典主義が旧態依然として存続しており、1年で文法と修辞学、2年で論理学と道德哲学、3、4年で幾何学とギリシャ語が教授されていた。

学寮生活は、午前5時からの礼拝に始まり、僅かに時間をとれる朝食を除いて午前中は講義に終始し、食事の時間でもギリシャ語からラテン語以外は話すことを禁じられており、午後もやはり講義があり、続いて討論や演説が行われ、夕方には再び礼拝堂にはいり、その後は担当教師のもとで一日の報告がなされなければならない仕組みになっていた。

ロックは、このような無味乾燥な人間性を押しつぶす教育に、ウエストミンスター・スクール以来の反感をつのらせ、学校教育への不信を強めたのであった。¹²⁾

11) 野田又夫「ロック」(講談社) p. 12

12) 大槻春彦「ロック」(牧書店) p. 27

当時、オックスフォードでは、依然としてスコラ的なアリストテレス主義の亜流が残っており、その研究態度は、いたずらに無用の問題を混乱した不
用な言語で論争するといった状況だったので、このような空虚な論争は、真
理を発見するには全く役に立たないものであり、学問の進歩を阻害するも
のであるとしていた。

ロックは、こうした環境の中で、青年期特有の懐疑と虚無に陥り、一時は
自分の性格が学者として向いていないのではないかと判断して、父親に方向
転換を訴え出ているのである。勉強よりも怠惰と快楽に興味を感じ、友人と
の談話に多くの時間を費やしたり、恋愛小説などを読みふけたりしている。

しかし、このようなロックに再び、学問的情熱を取り戻させたのは、デカ
ルトの「精神指導の規則論」(Regulae ad directionem ingenii)であった。

彼は青年期の憂鬱を乗り越え、4年後に文学士となり、さらに論理学、形
而上学、史学、自然科学、古典語の研鑽を重ねて1658年6月に学位をとり、
クライスト・チャーチの特別研究員(Senior Studentship)に選ばれ、ギリ
シャ語と修辞学の講師になったのである。¹³⁾

ロックの思想形成の上で、後年の彼をつくる第一歩がこの時期踏み出さ
れた。

4.

デカルトの書物に接したことは、アリストテレスやスコラ哲学によって失
った哲学や科学への情熱を再び燃えさせ、哲学的思索と人間理性の偉大さを
認識する契機となり、人間の内面について思索する習慣を獲得する結果を生
じさせたのであった。また、この頃、中世以来の古典中心の教育に固まっ
ていたオックスフォードにも、近世の新しい風が吹き始め、学問的にも実験や
観察を重視する実証科学が勃興してきたのであった。

当然ロックも実証科学への研究に心を燃やし、友人の科学者ボイル

13) 大槻春彦「ロック」(牧書店) p. 30

(Robert Boyle. 1627-1691) との密接な交渉によって、化学・気象学等の研究からもっと実地的な医学を研究し、医者になる決心を固めたのであった。

ロックが医学を知ったことは、実証科学の実験的方法が優れていることを彼は悟り、この方法を学問研究の方法として採用したことに大きな意義が認められる。彼が、近代科学としての医学にひきつけられたのは、もともと彼が科学の合理性に共感を覚えたからともいえる。

そして、ロックのこのような理知を尊重する傾向は、大学の外にも向けられ、当時の cromwell 政府の強権を行使した威圧的態度や行き過ぎた清教徒の狂信的言動にも向けられた。しかし、ロックは内心の確信をすぐ思想や行動に現していくタイプではなく、理知が支配する平和な社会を待望していたし、寛容な態度で耐えていたようである。

1660年、いわゆる「王政復古」がなり、ロックは統治者の絶対権を是認し、王の復位を歓迎している。この時点に於て彼は過去のイギリス社会の混乱と無秩序の害悪を憎み、王政の復古を、平和と秩序回復の兆しとして喜び、また、共和政府の独裁政治が私生活まで干渉して束縛してきたことに強い不満をもってゆえに、王政の回復を政治の自由だけでなく個人の自由の回復として喜んだのである。

この頃、当時イギリス並びに大陸でしきりに論議されていた「自然法」(The law of nature) の考察を行い論文を作成している。¹⁴⁾

人間の道徳行為の最後のよりどころとされるこの法の存在根拠と人間の自然法の認識理由、この法が人間を束縛して道徳的行為を行うことを責務とさせるかという強制力の起源について論述している。この考察は、彼の将来の主張ないし行動の基本的態度を表明したものと解釈できる。

1665年の暮、ロックはウォルター・ヴェーン卿 (Sir Walter Vane) の外交使節団の秘書としてブランデンブルグ公国へおもむき、初めて海を渡り、広い世間に接し、大陸ののびやかな雰囲気と、宗教的には複数の宗派が公認されお互いが容認しながら共存している寛容さに心をうたれたのであった。

14) 大槻春彦「ロック」(牧書店) p. 44

ロックは帰国するとすぐスペイン大使に随行する機会を与えられたが、熟慮の末に辞退し再び大学へ戻って研究に励み、医者を目指している。

1666年、医者として偶然のことからアシュリー卿（後のシャフツベリイ伯）の知遇を得ることになり、これがロックのその後の生活を決定することになる。¹⁵⁾

アシュリー卿は、当時イギリス第一級の政治家で、優れた才能と自由主義的な思想と愛国的情熱によって一般の人気を集め、チャールズ2世の最高顧問として参画している人であった。

1667年、ロックはアシュリー卿の家へ主治医として、公務上の相談役として、さらには息子の家庭教師として住み込むことになった。やがては、アシュリー2世の嫁の世話から出産の手伝い、孫の教育まで行い、公的生活に於てはアシュリー卿の影の存在として役目をはたした。

ここにおいて、ロックは政界の機微に触れ、見聞を広めることができ、さらには当代一流の知識人、学者と交わる機会を得て、極めて質の高い多方面の知識を身につけることができたのであった。

この頃ロックがまとめた仕事に、アメリカに於けるイギリスの植民地カロライナが発足するに当たって要求された「カロライナ政府のための基本憲法」(The Fundermental Constitutions for the Gorverment of Corolina) があるが、自由主義的な基調を持ち、信教の自由を強調した点などロックの政治思想の主要な要素が現れている。

ロックはこのようにして、政治問題に対しても知識を深めていったのであるが、医学についても研究を怠ることなく「解剖」(Anatomia)、「医術について」(De Arte Medica) 等の論文をまとめている。¹⁶⁾

1671年はロックにとって一番大事な年となった。この年にアシュリー家では、後の道徳哲学者シャフツベリイ3世 (Earl of Shaftebury. 1671-1713) が生まれ、彼は産婆の役をつとめている。一方、この年のある日、数人の友

15) M. Cranston : Locke p. 11

16) 押村 穰「教育に関する考察」(玉川大学出版) p. 370

人との会合でふとしたことから始まった疑問が、その後の彼の根本思想を形成した「人間悟性論」の作成の端緒をなしたからである。¹⁷⁾

論題の「道徳と啓示宗教の原理について」を話し合っているとき、四方八方から起こる難問に話が進展しなくなり、お互いが、知性が取り扱うのに適した対象と適さない対象とを調べる必要があると彼はおもいつめて、この考察をまず始めようとしたのが「人間悟性論」を書くそもそもの契機となったのである。

こうしてロックは、哲学者として彼の名を不朽のものとする道を歩み出したのである。1972年、アシュレイ卿がチャールズ2世から爵位を授けられ、シャフツベリイ伯爵となりやがて大法官に任じられ、ロックもこれに伴って多忙となり貿易植民委員会の委員としての仕事を行った。1673年春、王の命によって委員会は解散となり、シャフツベリイ伯も失脚した。

ロックはこれを機会に伯の許可を得て、南フランスのモンペリエ(Moutpellier)に出かけることになった。フランスではあらゆる労苦より解放されて、静かな生活を送ることができ、「人間悟性論」の稿を進め、パリに出て多くの優れた学者たちと交わり、また、デカルト哲学研究のための「手引」をフランス語で書いたりしている¹⁸⁾。

「人間悟性論」については、内省の観念まで進んでおり、悟性研究の極致であった人知の範囲や程度も考察し、神や道徳の問題も、近代科学の底にある空間や、スコラ以来の普遍も、意識内観の立場も吟味しているのである。

1679年には、シャフツベリイ伯が再び政界に復帰したため、ロックはロンドンに帰ったが、すぐ伯は王位継承について他の人々と意見が対立し罷免され、1680年7月には謀反罪のためロンドン塔に投獄され12月に釈放されたが、その後陰謀計画が挫折してついに1682年夏オランダに亡命、翌年アムステルダムで客死してしまった。

17) 大槻春彦「ロック」(牧書店) p. 65

18) Locke by John Dunn (Oxford University Press. 1987)

ジョン・ダン著、加藤 節訳「ジョン・ロック」(岩波書店) p. 18

ロックもオックスフォードにいたが、伯の片腕と見られていたので危険が身に迫り、1683年オランダに渡った。当時のオランダは、欧州に於ける経済、文化の中心地であり、言論出版、信仰、政治などの自由は、かなり広く許されていた。このオランダに5年間滞在して、優れた学者と交わり、快適な思索と執筆を続けたのである。

5.

ロックの教育思想を代表する「教育に関する考察」(Some Thoughts Concerning Education)の草稿となったエドワード・クラークへの手紙も、このオランダ滞在中に書き始められたものであり、1684年1月頃より体系的となり7月の手紙から原稿になったのである。¹⁹⁾1685年の春、イギリスではチャールズ2世が死んで、ジェームス2世が王位に就いたが、その頃ロックも陰謀計画に加わった危険人物の1人に指名され、イギリス政府からオランダ政府へ身柄引渡しを要求されていたのである。しかし翌年には赦免された。

「人間悟性論」の原稿の仕上がりはもう間近になっており、1688年の1月にアムステルダムの友人に見せてのち、その抜粋のフランス語訳を「世界文庫」の1月号に発表した。²⁰⁾

オランダ滞在の後半は、ロックはロッテルダムにいたが、ウイリアム公とメアリー公妃に親しくなり、後でウイリアム公が王位に就くに及んで「名誉革命」となる国王即位の計画に積極的に参加していたのである。

1688年イギリスのトーリー・ホイッグ党は一致してジェームス2世を廃して、ウイリアム公とメアリー公妃をオランダから迎え、ここにいわゆる名誉革命(Glorious Revolution)が成し遂げられたのであるが、それと一緒に5年半ぶりにロンドンへ帰ったロックは、革命の理論的指導者として大いに尊敬を集めたのである。

19) 押村 裏「教育に関する考察」(玉川大学出版) p. 387

20) 押村 裏「教育に関する考察」(玉川大学出版) p. 374

1690年に「政治論」が出版されたが、これは名誉革命を理論的に正当化するものであった。また、この年、ついに彼の哲学上の主著となる「人間悟性論」も出版され、20年の研究の成果がここに実ったのである。

1691年には、彼は政治との関係を一切断って思索生活に入り、マッシュム卿 (Sir Francis Masham) の家で「人間悟性論」の加筆やら「教育論」の草稿の整理、さらには「キリスト教合理性」(The Reasonableness of Christianity) の執筆、貨幣問題に関する3つの論文の出版等、彼の思想の整理をなしたのである。さらには、1693年には「教育論」が出版され、イギリス紳士教育に大きな影響を残すことになった。

ロックは、マッシュム邸ではクラーク一家をはじめとする親しい人々の訪問を受け懇談しているが、その中には物理学者のニュートン (Isaac Newton. 1642-1727) がおり、ニュートンも「万有引力の法則」を確立して間がないときであり、自然科学の様々な問題について話し合い、ロック自身の思想に新しい知識をつけ加わえることになったのである。²¹⁾

公職から一旦退いたロックも、1696年に新設された貿易植民委員会の委員に任命され、この委員会の指導的立場に立ち、1700年に辞めるまで熱心に勤めている。健康を理由に引退を漏らしたのであるが、事態が許さなかったようである。

国内問題で当時ロックが心を悩ましていたのは失業と貧困で、彼の考えは、こうした社会的に望ましくないことも、結局、人の怠惰のせいだとして、これを改めるために、酒場を取り締まる法を強化するほか、新しい法律を制定して、許可無しにもの乞いをするものを強制的に労働させることを提案している。

また、同じ趣旨で貧民の子弟のために労働学校を教区ごとに設ける案を考へたりしているが、結局のところ弁務官の賛成が得られず実現にはいたらなかった。

しかし、これは彼の思想の中で注目すべきことであり、特に教育思想上、

21) 田中 浩, 平井俊彦, 浜林正夫, 鎌井敏和「ロック」(清水書院) pp. 35-36

家庭教育の理論だけでなく、立派な労働学校案をもっており、勤労と教育を主体とした労働学校の先駆的主唱者としてとらえることができるのである。

1701年より、彼は耳を患い、その耳は1年ほどで回復したが、余生を静かに読書と宗教上の思索で過ごすことになり、もっぱら新訳聖書のパウロの書簡の綿密な註を加える仕事に終始した。そして1704年10月になくなるまで、一生思索しながら日々を送ったのである。

ロックは、彼の遺志にしたがって、ハイ・レイヴァの墓地に葬られた。²²⁾

『旅人よ、足をとめよ。この地の近く、ジョン・ロック眠る。彼がどうい
う人であったかと問われるなら、つつましい運命に満足していた人だと答え
よう。学者として育てられ、ただ真理の追求に研究を捧げた人である。この
ことは彼の著書から知られるであろう……。中略……1632年8月29日に生ま
れ、1704年10月28日に没す。この碑は一つの記録であるが、ほどなく失われ
るであろう』²³⁾

彼自身が選んだ碑銘がラテン語で大理石に刻まれて墓の上に立てられたと
のことである。

22) M. Cranston : Locke (Longmans, Green & Co 1961) p. 23

23) 大槻春彦「ロック」(牧書店) p. 96